

# 第1回下北沢国際人形劇祭2024

# DAILY JOURNAL

## DAY5

Sunday,  
February 25,  
2024



これはオブジェクト・音楽劇とでも言うのだろうか。晩餐会のテーブルに並べられたグラスは楽器になり、それからダンスを踊り噂話をする「人形」になる。出演者は演技をする俳優であり、音楽を奏でる音楽家であり、オブジェクトを操るパフォーマーでもある。『アンナ・カレーニナ』をモチーフにしているとはいえ、ある意味普遍的な「死について」が軸となり、作品はめまぐるしく展開する。モノも人も役割がころころと変わり、今見ているものが何なのか、ときに見失ってしまうこともあった。だがそうやってごちゃ混ぜになった舞台を分からないまま眺めていても、作品を楽しめてしまうから不思議だった。この人形劇祭に参加して4日目にもなると、今の人形劇界におけるテーマの一つに「境界の曖昧さ」があることが分かってきたが、本作はまさにその境界をいかに崩すかに挑んでいるように感じられた。役割の変容がリズムカルかつ豪快な展開を生むことはもちろん、舞台上のテーブルは「ここで人形劇をやりますよ」というパフォーマンス・ステージを思わせるが、実際出演者は舞台上を縦横無断に動き回ったかと思えば劇場内のあらゆる扉を活用し、観客席をも通って劇場空間全体を一つの「ステージ」にしてしまっており、人形劇における舞台空間の限界も突破しているように思えた。しかしだからこそ、舞台上に鎮座する楽器さえも「演奏する」以外の役割を担うオブ

ジェクトになってしまうのではないかと、つつい期待してしまった。もしかしたら、そんな構想もすでにあるのかもしれないが。  
吉平真優（デイリージャーナル編集部）

**We** are going to die.

The performers point at us, yelling happily that we are all destined to die. Then they leave the stage, crawling out of a hole on the back wall of the stage. That's basically how it ends.

"KAR" is a humorous and musical "puppet" show with just the right amount of good sarcasm. Other than this almost dying man, there are 5 characters on stage. The storyline is based on "Anna Karenina" by Tolstoy. I have known the plot of the book vaguely, but never read it cover to cover. To be honest, I never clearly got who's who during the show as it's always the case with Russian literature. However, it didn't matter. Meanings are not essential when it comes to watching this show. It's not because we are going to die, but because we are going to enjoy the show even just by its exquisite musicality. The musical instruments are not the only elements that add the musical flavor to the show, but also the performers themselves create a certain rhythm altogether. They sing. They roll glasses.

They generate smoke out of a jar. They put a tiny train on the table, let it run. They smoke. They turn glasses into living creatures. Free vodka shots to the audience, then tea time! Then... All these nonsense surprises keep coming one after another, and its jazz-like mixture of solid tempo of the storyline and unpredictable phenomena keep its tension to the last moment. Although the performers made the act more accessible by using Japanese here and there (which was very nice and effective), rhythm is their language. I also joined their concert a few days ago and felt the same. Fekete Seretlek's music/rhythm truly conveys their personality and attitude and it makes people happy. I saw it, it's true.

As the show ended, a young boy next to me turned to his father and said with a bit of confusion and a smile on his face "...Dad, I didn't really get what it was". Then his dad gently answered, "It's okay, son. Me neither." Then the boy said, "I guess it was not quite a puppet show either, was it?" Dad grinned and was not able to reply. I don't think any adults there really knew how to reply to that question. And then the boy continued, "But it was so fun!" Yup. It WAS indeed, I agree.

青木直哉（デイリージャーナル編集部）



# KAR DAMUZA + Fekete Seretlek



**喧騒**と狂乱。これ程までに勝手放題する舞台に巻き込まれ、笑わずにいられるだろうか。けたたましくパワフルな音楽の合間に、神妙な面持ちで始まるのは、トルストイの「アンナ・カレーニナ」を下敷きとした物語だ。四人の男性とアンナ役の女性は人形劇によってアンナの人生を再現する。彼らは、紙やボトルを見立てることで、即時的且つ格式ばらない人形劇を生み出した。物語の深刻な様相に対して、細長いテーブルの上で行われる会話は、何処かちぐはぐで、あっけらかんとした明るさに満ちている。男性らが演じる人形と会話しているアンナの声は、次第に大きくなり、いつしか賑やかな音楽に変貌していく。

そう、彼らは何でも音楽にした。アコーディオンにヴァイオリン、コントラバス、チェロ、トランペットを中心としながらも、多才な彼らは、歌やタップダンス、挙句の果てには日用品までもを楽器に変えてしまう。ウォッカの瓶を取り出し、ありったけの中身をグラスに注いで客に振舞ったかと思うと、今度はその空き瓶を机に打ちつけるリズムが生まれる。軽快で空っぽの会話は、空き瓶のリズムに乗り、歌のように聴こえ始める。気づけばそれは大合唱になっていた。まるで濁流の如く押し寄せる音楽に、あっという間に舌を巻かれ、魅了されていく。

六十分間、彼らは生命力に満ちたどんちゃん騒ぎで大いに客を楽しませてくれた。死に向かう！と笑い、飲み、歌い続ける彼らの乱舞は当分忘れられそうにない。  
小林知夏（デイリージャーナル編集部）

**何**が起こってるのかよくわからない、けどめっちゃ面白い、これが『KAR』を観た時の偽りない感想だ。まず、私は劇場に入り、空いている席を探しながら舞台の方向に目を向ける。そしたらそこには、白いフリルが飾ってあるテーブルの上に、お腹にアコーディオンをのせた男性が横たわっている。その近くでは、正装した男性が観客の姿を見て何かを羽ペンでメモしている。ローラースケートをはいて舞台を駆け回る男性もいる。後ろにはチェロもある。そこには美しく、ちぐはぐで、リズムカルな謎の空間が出現している。  
劇が少し進むと、横たわっている男性が死

にかけている、ということが分かってくる。なるほど、テーブルは棺で、男性のお腹にあるアコーディオンの蛇腹の動きと音の響きは弱っていく呼吸の表現なのか、など私は解釈してみる。しかし、序盤数分で何とか理解したその状況すらも、死ぬのが「今日」か「明日」か、「30年後」か、という言葉と、男性がテーブルから起き上がる勢いの強さで打ち消される。30年後だったら、今葬式しないでいいじゃん！と、つっこみたくなる。

本作は『アンナ・カレーニナ』の世界を表現しているとのことだが、大変残念なことに私は原作のあらすじを断片的にしか知らず、劇のストーリーをはっきり追うことはできなかった。ストーリーの代わりに、この劇の魅力は数々の断片として私の記憶に残った。英語の台詞の間にいきなり挟み込まれる日本語「ですか」。トランペット、チェロ、アコーディオン、たまにベース、人間の歌声、あるいは様々な形のグラスたちによる陽気で楽し気な、迫力ある素敵な音楽。人間たちの陽気な宴会の横でグラスたちがテーブルを生き生きと踊りまわり、グラス同士で噂話をする。優雅な貴族たちと浴びるように飲まれるウォッカ。羽ペンと紙とバチでかたちづくられ、すぐに消えていく鳥。躍動する生とすぐそばに横たわる死（とはいえ、この劇の最後には演者たちがDie！ Die！ Die！と叫びまくって死すらも何か浮かれた、活動的なものに見える）。

そこにとどまるものではなく、すべてのシーンが一瞬でさかさまにひっくりかえる可能性を秘めている。私はこの劇のすべてを意味あるものとして受けとることはできなかったが、意味からあふれつつこの優雅で静かで陽気で騒々しくて陰気でハチャメチャな一瞬の宴会を楽しんだ。

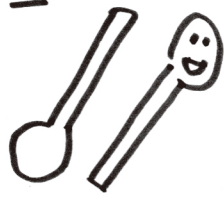
東風ゆば（デイリージャーナル編集部）







借リグラフィー | 昔はひめ  
 が、でも、<sup>に</sup>た<sup>に</sup>て  
 はじめたのに  
 どれふいかると  
 スプーンで  
 ゴム一ん  
 きんちえー感あつて  
 たのしか、たー



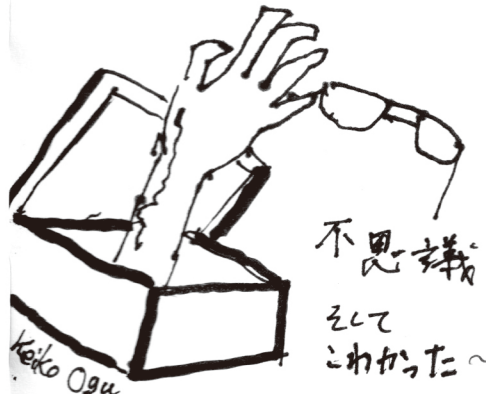
額に書いて

家の  
 ゲンカンに  
 飾ります

Thank you



Überrascht



不思議  
 として  
 かわった~

Keiko Ogu



Best <sup>pp</sup> Music

KAR



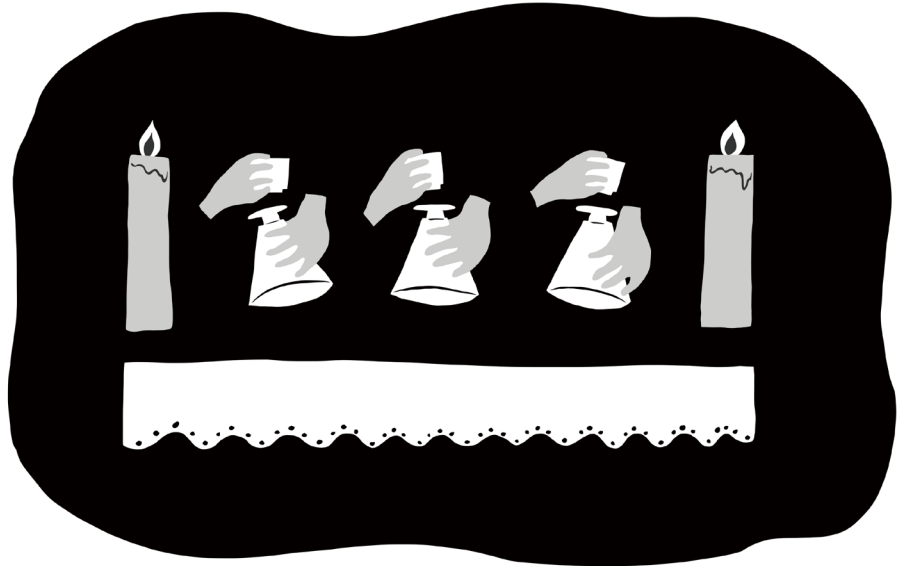


スズナリホール。劇場前の道路沿いで列。できるだけ日常を引き連れないように、劇場に足を踏み入れる。

舞台。芝居はもうすでに始まっている。中央に構えられた長机。不健康そうな男が横たわったままアコーディオンを奏でている。その周りに数人の男。下僕風の男に、水、タバコ、その他の要求を投げながら、不健康な男は介抱されている。その舞台上、皆が一様に順調でない表情を浮かべている。何かが上手くいっていないらしい。これが開場中。客は徐々に席につく。

劇場に入る時、役者のひとりに「お心遣いありがとうございます。」と言われた。心遣い？何か募金を求めているのだろうか？それとも日本語を間違えている？この作品は、英語、チェコ語、そして時折日本語で上演される。客入れ中の”上手くいっていない感じ”と、その一方でこの上演はたぶん”本当に上手くいっていない”と想像する。なにしろ17時に開演される予定がこのとき既に17時20分。まだ客入れが終わっていないのだ。さらに、やっと芝居が始まるかと思ったすんでのところ、客席最前列に座っていたピンク色の髪の女性が荷物を抱えて帰ってしまった。慌てふためく役者たち。演技の虚構が現実になる。(帰った女性は何が嫌だったんだろう。舞台上でふかされていたタバコの煙だろうか。)そんな状況で、上演がはじまる。

冒頭で主人公が突然死ぬ。この演劇祭で数日前に見た”stickman”でも主人公は死んだ。その他の作品のステートメントからも”死”の匂いがする。そのことを羨ましく思う。そういった作品って東欧に多いのだろうか？その感覚を身につけたいと思った。この作品は劇中に音楽がふんだんに盛り込まれて、いや、この作品は”音楽劇”ではなく、”演劇的ライブ”であると理解したい。役者は全員楽器を演奏するし、歌唱する。役者の立ち位置はほぼ固定されて、ワンシチュエーション。演劇的役の関係を作ろうとしない。全員ほぼ出ずっぱりで、その点でもこの作品は演劇ではなくライブである



と理解した方がしっくりくる。だから物語よりも演奏に心躍ったり、何かを心象したり、イメージが脳裏に焼き付いたりすることを途中から求めた。そういった瞬間が劇中で多々あった。

ただひとつだけ考えた。この作品が構えるただひとつのシチュエーション。ここはどこなんだろう。机、男、死。不健康そうな男は冒頭で息絶えようとして、それでいて死ななかった。

死ぬのは今日じゃない。「人は死ぬ。いつか死ぬ。今日かもしれないし、明日かもしれない。それは30年後かもしれない。」その通りだ。本当のことしか言っていない。

「グラスを持ってこい！」そんなセリフで口火を切ってこの演劇的ライブは始まった。そこから音楽と交錯するように引用されるトルストイの小説。100年以上前の言葉、文字、愛、手紙、火、燃える手紙の文字、去る女、煙、光、そこに大量の音楽とタバコと酒が注がれ飲み干される。上演後、あのウォッカは本物だったと言っていた。色々心配になる。この日はその後2ステージ目が予定されているのだ。それでも上演は続く。酒を飲み楽器を掻き鳴らし文字は燃やされ、煙も光も音も声も形を失ってこの場

に充滿していく。

歌い出す。We are going to die. まさにその通りだ。We are going to die. 何も上手くいっていない感じ。僕らはそんな世界を生きている。固まった価値を求め、でも時にそんな崇高な価値は酒と音楽で掻きむしりたくなる。We are going to die. 目の前で作品と現実が折り重なった。

ラスト。不健康そうな男は舞台上にひとり取り残される。その他の役者は歌いながら舞台奥の扉の向こうに消えていなくなった。広がった作品世界が急速に舞台上の男の足元だけに萎んでいく。地に足がついた。散らかったグラス、楽器、燃えかすと紙とウォッカ。そうか、ここはこの死のうとして死ねない男の部屋だったのだ。ハッ。そのことに気が付くと同時に舞台は暗転して世界は現実だけになった。最高だ。こんな男が今もこの世界のどこかにいる。

そんなことを想像して、We are going to die. 2ステージ目ももっと上手くいっていない感じでやってくれ！以上。オブジェクトシアターっぽいレポートができなくてすまん。

前田斜め (デイリージャーナル編集部)

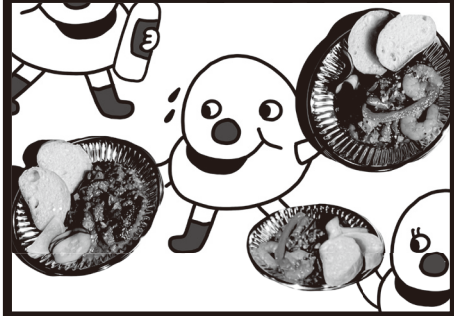
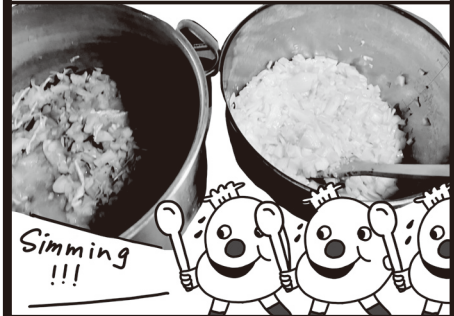
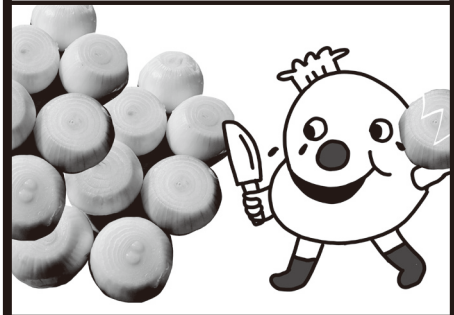
## 音楽テント Re: 本田祐也の移動広告テント トラベルムジカ





# MANGA

SONG YUE @eozislet



パフォーマンス

## オブジェクト・借りグラフィー

パフォーマンス : Darragh McLoughlin

音楽 : John Summers

ダラーさんが皆さんからオブジェクトを借りて身体のどこかに置き、バランスを取りながらカリグラフィーを書くワークショップの様子をお届け！



レクチャー

## 人形劇 × 映画・演劇・舞踊

超満員のフェス

ティバルセンターでのレクチャー。一週間にわたって開催されている人形劇祭の折り返しの日にこのレクチャーが用意されていたことは、後から思えば巧妙なスケジューリングだった。すでに先の三日間でいくつもの作品を鑑賞し、自分の「人



形劇」に対する感覚が広がっていった最中にこうして専門家たちによる人形劇世界の分析を聞くことで、それまでの鑑賞体験を振り返りながら自分の中で整理をしていくことができ、非常に有意義な時間だった。逆にこういう話を初日に聞いていたならば、「人形劇の見方」を意識してしまっただけで、以降の観劇でもいままほ自由で作品を受容することができなかつたのではないかなと思う。

レクチャーの内容は、映画、バレエ、そして演劇の専門家がそれぞれの視点から「人形劇」を分析したもので、人々の「人形」に対する捉え方の歴史的変遷を知ることができた。映画ではモニターに映される人間

と人形の対比構造が、バレエでは人形の動きを人間が模倣する手法の意味付けが変化しているとのことだったが、このようにさまざまなジャンルと影響しあう「人形劇」というジャンルの奥深さを実感した。また、西洋演劇史における人形劇の位置付けについて、古代ギリシアでの神聖な彫像を動かしていたという起源からローマ時代には劇内容が卑俗化したこと、中世の教会内での儀式的な上演から近代にはギニョールやラフルールといった権力批判的なものが現れるようになっていったことなど、宗教的なものから世俗的なものへの変化が見られるという分析も興味深かった。

吉平真優 (デイリージャーナル編集部)

### 今日の デイリージャーナル編集部

文:

吉平真優  
青木直哉  
小林知夏

東風ゆは  
前田斜め

絵:

青木直哉  
マユキー・カーン  
荒木穂香

写真:

山口梓沙